

アメリカの大学で拡大する条件付き入学

—— 『高等教育クロニクル』の記事より ——

宮 田 実 (訳)

“Colleges Extend Conditional Admissions to Pull In More International Students”

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

留学生獲得戦略

サウジアラビアのラシード・アラナジさん(21歳)はアメリカ留学を夢見ていた。しかし、彼にはアメリカの大学の授業についていくための十分な英語能力がなかった。彼は2010年2月に渡米するまでに2ヶ月間の英語集中プログラムを受けただけであった。しかし、彼はニューハンプシャー州にあるプリマス州立大学に入学を許可された。ただし、正規の授業を受ける前に英語能力を向上させるという条件付きであった。サウジアラビア政府奨学金を給付されているアラナジさんはすでに集中英語講座の初級から中級へと進んでおり、2011年には経営学の勉強を始めたいと思っている。彼は「アメリカは勉強するには最高の国です。世界のトップレベルの大学がこの国にはありますから」と言う。

アラナジさんのように英語能力が入学基準に満たない場合、条件付きで入学を認められた留学生数に関する統計はない。条件付きで入学した学生は入学した大学またはその大学公認の英語学校で英語能力を磨いた後、英語能力試験を受けることになる。

アドミッションオフィスの留学生担当者や英語学校の教員によれば、条件付き入学制度は増えているとのことである。プリマス州立大学のように留学生を増やすために条件付き入学制度を取り入れている大学もある。長年にわたって条件付き入学制度を実施している

大学によれば、この制度に対する関心は急激に高まっているとのことである。30年前からこの制度を取り入れているアイオワ州立大学ではここ数年で集中英語プログラムの登録者が3倍に増えた。

セントルイス大学では2010年の秋、集中英語プログラムに200人の条件付き入学生を見込んでいる。同大学留学生課のバリー氏は「時代の流れですよ」と言う。条件付き入学生の増加の背景には多数の中国人留学生の増加がある。それら中国人留学生の中には実際に英語学習が必要な者もいるが、高校の卒業試験や中国の国立大学の厳しい入試の準備で忙しく英語能力試験を受ける時間がない者もいる。

この制度は単に英語学習目的で申請するよりも条件付き入学許可を得たほうがビザが取りやすいと思う学生にもアピールする。クレムゾン大学英語教育センター長のケリーさんは「アメリカで学ぶということは現在のような経済情勢の下では大きな投資になります。留学生たちはなんらかの保証が欲しいのです」と言う。

アメリカの大学では条件付き入学制度は優秀な留学生獲得競争が厳しい現在、学生獲得戦略の1つとして受け入れられている。ニューヨーク州立大学のレヴィンサール副学長は次のように指摘する。「これまでアメリカの大学は大学独自の基準で入学者を決めてきましたが、現在では条件付き入学を学生獲得戦略の一部と考える大学が増えてきました。もしこれをやらなければ市場の重要な部分を切り落とすことになるのです。」

集中英語講座

条件付きで入学する学生の多くは英語能力以外の能力では入学要件を満たしている。インディアナ州にあるパデュー大学のアラエイ留学生部副部長は「条件付き入学は学力不足だからではないのです。うちの留学生はアメリカ人学生よりも概して成績はいいんです。彼らの学業レベルは十分大学の基準を超えているんです」と言う。同大学では入学基準として要求するトーフル（TOEFL）または国際英語力試験（Ielts）のスコアを満たしていない志願者を条件付きで入学させることがある。同大学では条件付き入学制度を実施している多くの大学と同様、1年間という期限を設けている。英語能力が基準に達するのにまる1年かかる者もいれば、1学期または夏学期のあいだに英語能力を上げる者もいる。

これまでは自前の英語教育施設を持つ大学のみが条件付き入学制度を実施することができた。しかし、今日では英語教育の専門業者と提携する大学が増えている。その業界大手のELS社は全米の大学キャンパス内に55ヶ所のセンターを持っており、その他数百の大学と提携している。

カリフォルニア州にあるラヴァーン大学は4年前にELS社と提携した。留学生担当の責

任者のナンメイカー氏によれば、同大学はELS社と提携することによって事務負担を増やさずに急速に留学生を増やすことができた。同大学への志願者は大学とELS社のセンターに願書を提出する。するとELS社のスタッフは事務手続きを行い、ビザ取得に必要なI-20という書類を発行する。

ELS社は英語教育も担当する。同社が実施する英語講座は初級から上級まで全12レベルあり4週間単位で週30時間である。講座の内容は語彙、文法、スピーキング、リスニング、ライティング、アメリカの文化や習慣などである。上級クラスでは大学テキストも使用される。大学に正式に入学するためには、学生はELS社の講座を修了し英語能力試験を再度受け基準に達しなければならない。大学によっては更にプレイスメントテストを課すところもある。

独自の英語講座を実施する大学もある。例えば、セントルイス大学では英語講座の受講生に対しスピーキングの練習のために教室外の地元地域での奉仕学習プロジェクトへの参加を義務付けている。また、大学の優秀な学生と1対1の会話練習の機会を与えている。英語講座を修了する前の学生で特に優秀な者は大学の正規の授業の一部を受講することができる。

中国にあるAoji教育社のホー副社長によれば、アメリカの大学経営者は条件付き入学制度は英語能力が不足する学生にとってはとても重要なものであると言う。ホー氏は「母国内で受ける教室での英語学習とアメリカで受けるトータルイマージョン学習（生活全体の中での学習）とは全く違います。アメリカでの集中英語講座は留学生がアメリカの大学で学習する上で必要な事柄を身につけさせます。そしてこのような講座を受けた者は良い学習成果をあげます」と言う。

増加する中国からの留学生

2010年の春、上海でAoji教育社とELS社は共同で留学フェアを開催した。ELS社は知名度の低い大学に対して同社のネットワークを利用して学生、親、学校に宣伝するという留学生獲得法を伝授した。今回の留学フェアに参加したプリマス州立大学は留学生獲得に苦勞していた。最近同大学の学生関係の副学長を辞任したヘイグ氏は「我が大学は知名度がないんですよ」と言う。2009年9月にELS社と契約した後、プリマス州立大学は同年末までに58人もの留学志願者を得た。同大学にはこれまで全学で70名ほどの留学生しかいなかったのである。

プリマス州立大学と同様、大学の国際化や厳しい経営状況打開のため留学生の獲得を迫られている大学も多い。そのような大学の中には条件付き入学制度を留学生を増やすため

の手段と考えるところもある。タンパ大学で留学生を担当しているダポンテイ氏によれば、いくつかの大学から同大学が使用している条件付き入学通知の手紙のコピーを求められたと言う。

ラヴァーン大学のナンメイカー氏のもとへは外国人志願者から条件付き入学制度について問い合わせが来ている。彼は「友達が条件付き入学許可をもらったので彼らも感心があるんですよ」と言う。彼は更に、留学生にとってアメリカの大学入学許可はたとえ条件付きであっても入国ビザを入手しやすくするというメリットがあると言う。(アメリカ国務省の高官によれば、ビザ発給に関しては英語学習が目的の学生に対して差別はしないとのことである。)

クロニクル紙が調査した大学のほとんどは条件付き入学許可を受けたのは圧倒的に中国人が多いと答えた。アイオワ州立大学のパーカーさんによれば、同大学にとってとても重要な中国人留学生の多くは聡明な学生たちであり、彼らは英語能力試験の準備のために中国の国立大学受験のための学習を犠牲にしたくなかったのである。

中国以外でアメリカへ多くの留学生を送り出す国としては、日本、サウジアラビア、韓国、タイ、トルコ、ベトナムなどがある。その背景として、中流階級の台頭や政府奨学金の充実がある。

実現可能な選択肢

条件付き入学生から正規学生になっても留学費用は高額である。正規学生より安いとはいえ英語講座の授業料は決して安くない。例えば、セントルイス大学の英語講座の授業料は9ヶ月のプログラムで11,010ドルであり、生活費を入れると約25,000ドルになる。この費用を考えれば条件付き入学が多くの留学生にとって実現可能な選択肢とはなり得ないかもしれない。

条件付き入学制度は大学院生に対してはあまり実施されることはない。なぜなら、大学院生の場合はGRE(大学院入学適性試験)でいい成績を取るぐらい英語能力が高い場合が多いからである。更に、大学院特に博士課程レベルでは入学生数が極端に少なく選抜が厳しくなる。

かつては条件付き入学制度を採用していた大学でそれを止めた大学がある。サンフランシスコにあるゴールデンゲート大学のPLUSプログラム(英語教育と大学教育の融合プログラム)の責任者であるマクロビーさんによれば、同大学の条件付き入学制度は大きな利益をもたらしていた。しかし、2003年にその制度は大学の使命を果たすためにはふさわしくないという理由で廃止された。マクロビーさんは次のように述べる。「条件付き入学の

学生は自由契約選手のようなものなんです。だから最終的に入学した学生はあまり多くなかったのです。しかし、現在実施している大学の正規の授業と英語教育と教学側の支援を融合させたPLUSプログラムは残留率が高く90%にのびります。」

条件付き入学制度に関するこのような危惧は他大学ではあまり見られない。セントルイス大学のバリー氏によれば、同大学では条件付き入学許可を受けた志願者のうち80%以上の者が入学する。彼は更にこう付け加える。「われわれが伝えたいことは、成功しそうな留学生たちには英語が障壁になってほしくないんです。」

(2010年 8月13日号)

(Copyright 2010. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.)

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はカーリーン・フィッシャーさんである。

今回取り上げたのはアメリカの大学における条件付き入学制度である。アメリカ経済が依然として低迷する現在、大学の学生獲得競争は厳しくなっている。このような状況の中、条件付き入学許可制度によって多くの留学生を獲得したい大学が増えている。アメリカは世界最大の留学生受入れ国であり、中国をはじめとしてアメリカの大学への進学希望者は依然多いのである。条件付き入学許可制度は英語能力が不足する留学生に対する一種の救済制度である。アメリカ留学を目指す者にとっても、安定経営を目指す大学にとってもそのメリットは大きい。

日本の大学では条件付き入学ではなく、日本語教育と大学教育の融合プログラムを実施しているところが多い。留学生別科を設けて独自のカリキュラムを実施しているところもある。今後、日本への留学生が増加するにつれアメリカのような条件付き入学制度を取り入れる大学が出てくるかもしれない。